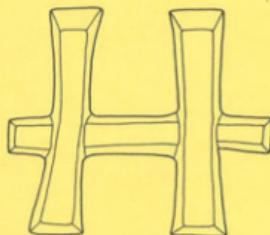




宍道町埋蔵文化財調査報告 2

—地域と古墳と磨崖仏—



1980年3月

島根県宍道町教育委員会

序

穴道町ではおそらく 2000 年ばかりの昔にはすでに農村の元が起り、古墳時代に入ると耕地の開拓も進み、集落ができるたことは古墳の分布からも明らかであるうえに、それは律令時代に「穴道郷」として編成されるだけの内容をもつものにまで発展している。

6 世紀後半ごろと思われる大規模の椎山 1 号墳（昭和 48 年県指定史跡）をはじめ椎山 2 号、3 号墳は早いころの古墳であり、これに統いて伊賀見古墳、下の空古墳は 6 世紀後半から 7 世紀初めごろのものである。これらの墳丘は小規模であるが、内部構造は整った入念な作りであって、村落内の支配的階層に属する人物の墓であろう。また、多数の横穴もほぼ同年代であるが、やや低い階層の人々の墓といえる。

今回の埋蔵文化財調査は、特に白石地域の古墳群を現地調査し、この時代の歴史的環境の中での村落形成、支配構造を明らかにするものである。また、踏査によって椎山 4 号墳、才横穴群Ⅱ、Ⅲ群を発見したことは分布状況を知る上でも大変重要なことであった。

併せて、東来寺の久戸にある磨崖仏の調査も実施した。これは古くから知られた千体仏でありながら、古文書等がないため放置されていたもので、今回の調査によってその価値が認められたものである。

おわりに、この報告書が後世に伝えるべき埋蔵文化財の資料として各方面に利すること多きを期待すると同時に、調査・執筆いただいた方々並びに関係各位に対し、心から謝意を表する。

昭和 55 年 3 月

穴道町教育委員会

教育長 小豆沢 岩 雄

例 言

1. 本書は島根県八束郡宍道町に所在する埋蔵文化財の保護、活用を目的とする埋蔵文化財調査報告書である。
 2. 対象遺跡としては宍道町白石地域所在の古墳と来待地区的久戸千体地蔵仏を選んだ。
 3. 本書の執筆・編集は宍道町教育委員会（教育長 小豆沢岩雄）の委託をうけた12名の調査員がこれを行ない、適宜地元の方々や川上 稔、岡山和男、房宗寿雄の3氏に協力、援助をうけた。また、原 宏一氏には特別寄稿をいただいた。
- 調査員 Ⅰ章及び総括 赤沢秀則、飯國芳明、石飛公士、稻田 信、大国晴雄
岡本 輝、片山泰輔、鳥谷芳雄、中浜久喜、西尾克己
- Ⅱ 章 青木 博、岡崎雄二郎
- 事務局（教育委員会） 五百川秀男
4. 調査は1979年3月から1980年2月の間を中心に行ない、その前後に若干の予備、補足調査を行なった。
 5. 本書中に使用した図版・写真は、特にことわらない限り調査員にかかるものであり、図中の方位は磁北を用い、縮尺はそれぞれ明示することとしている。また、山本清「宍道町における古墳及び出土品」（『宍道町誌』宍道町 1964年）を編集にあたって参考にしたことをお記しておく。

目 次

序

宍道町における遺跡一覧および分布図

I 白石地域の古墳	2
歴史的景観	2
1. 姉山古墳群	4
2. 伊賀見古墳群	10
3. 下の空古墳	17
4. 萩 古 墳	20
5. 才 横 穴 群	21
小 結	32
II 久戸千体地蔵仏	33
（付）地域と古墳と磨崖仏	40

（表紙カットは伊賀見1号墳の隕石の陽刻）

表1 宍道町埋蔵文化財一覧

編	名 称	所 在 地	備 考	編	名 称	所 在 地	備 考
1	弘長寺遺跡	東来寺弘長寺	石斧、黒曜石	33	刈山古墳群	東来寺弘長寺	横穴あり
2	三成遺跡	" "	弥生式土器	34	千原古墳	" "	須恵器、土師器
3	松石1号墳	" "	方墳、木棺直葬	35	中垣遺跡	西来寺中垣	方墳、直刀
4	" 2号墳	" "	箱形石棺	36	大野原古穴群	" 火野	3穴
5	" 3号墳	" "	方墳	37	小松横穴群	" 小松	3穴以上、石棺
6	" 4号墳	" "	直刀、鎌、斧	38	栗尾山横穴群	上来寺大森	"
7	" 5号骨壙	" "	方墳	39	佐倉機穴群	" 佐倉	"
8	" 6号墳	" "	"	40	佐久多神社裏古墳群	" 大森	円墳3基
9	" 7号墳	" "	"	41	菅原横穴群	" 菅原	6穴、須恵器
10	" 8号墳	" "	" 、木棺直葬	42	椎山1号墳	白石下倉	前方後円墳
11	" 9号墳	" "	"	43	" 2号墳	" "	方墳
12	松石横穴	" "	石棺、太刀	44	" 3号墳	" "	"
13	三成1号墳	" "	"	45	" 4号墳	" "	石棺式石室
14	" 2号墳	" "	"	46	伊賀兒1号墳	白石下白石	方墳
15	" 3号墳	" "	"	47	" 2号墳	" "	"
16	弘長寺古墳	" "	箱形石棺	48	" 3号墳	" "	"
17	弘長寺横穴	" "	3穴	49	" 4号墳	" "	"
18	明寿廻古墳	" "	方墳4基	50	下の空古墳	" 上白石	石棺式石室
19	多井古墳	" "	方墳	51	下荻坪ノ内古横穴	" 下白石	方墳、須恵器
20	大紋古墳	" "	"	52	ノ内跡	" 上白石	石宮神社横
21	鏡北廻古墳	" "	石棺式石室	53	下倉	" 下倉	石棺、鐵嶺、刀子
22	塚烟跡	" "	須恵器	54	女才才横穴群	" 才	円墳
23	草の上東遺跡	" "	"	55	才横穴群	" "	1~II群
24	草の上遺跡	" "	" 、上製支脚	56	OM前公園横穴群	" "	消滅
25	松石遺跡	弘長寺	"	57	平田遺跡	佐々布岡の目	弥生式土器
26	" 北遺跡	" "	"	58	佐々布遺跡	" 佐々布烟	土師器
27	多井遺跡	" "	" 、土師器	59	佐々布遺跡	" "	石畿
28	寺谷北遺跡	" "	土師器	60	荻田遺跡	" 荻田	消滅
29	寺谷遺跡	" "	須恵器、土師器	61	荻田古墳	" "	消滅
30	明寿廻遺跡	" "	"	62	深坪の横穴	宍道深坪	
31	高松1号墳	高松	"	63	佐倉末の横穴群	上來寺佐倉末の廻	2穴以上
32	" 2号墳	" "	円墳	64	伊野谷遺跡	" 来寺	圓文式土器、須恵器



図1 穴道町内における遺跡分布図(1/50000)

1 白石地域の古墳

歴史的景観

白石地域は同道川と才川によってつくられた小規模な2つの谷間で構成され、古くから来待川流域とともに穴道地域において主要な役割を果していた地域である。以下、白石地域を中心とした穴道地域の歴史的景観の概要を述べることにする。

穴道町内で最も古い遺跡は縄文時代に属し、現在、穴道湖の湖岸付近に分布する3遺跡が知られる。遺跡としては後・晩期の粗面無文土器をもつ三成遺跡（来待）、鐵や石錘等の石器と多量の黒曜石片が採集されている弘長寺遺跡、晩期の貼付突帯を口縁部に有する土器をもつ伊野谷遺跡（西来待）が挙げられる。これらの遺跡は範囲が狭く、時期も限られているのが特徴であり、当時の生活は前面に広がる穴道湖での漁撈と背後の低丘陵での動植物の獲得に支えられた貧弱なものと考えられ、集落も小規模であったと推定される。

次に、稻作が始まる弥生時代の遺跡は上記の三成遺跡（中期後半に属する菱形土器が検出されている）が存在するだけである。今後の遺跡増加をまちたい。

古墳時代に入ると低丘陵上や山腹に古墳と横穴群が多数出現し、町内に点在する遺跡の約8割を占める。大形の古墳や規模の大きい横穴群は来待川流域および白石地域に集中し、内でも特異なものは白石地域に多い。来待川流域には箱形石棺や木棺等を内部主体とする松石古墳群や、横穴式石室を内部主体とする知原古墳群、組合式家形石棺を有する栗尾山横穴群1号穴、松石横穴、さらに内部主体が石棺式石室であり、玄門の閉塞石に門状の陽刻を有する鏡北廻古墳が挙げられる。一方、白石地域には全長36mの前方後円墳を含む椎山古墳群や石棺式石室を内部主体とし、閉塞石に前記の陽刻をもつ伊賀見1号墳と下の空古墳および荻古墳があり、横穴群としては3支群よりなる才横穴群等が知られている。これららの古墳や横穴の築造時期も前者とはほぼ同じ頃である。

さて、前述した古墳や横穴にはいかなる人々が葬られたであろうか。

白石地域の場合、最大規模を有する古墳は前方後円墳の椎山1号である。これに準ずるものとしては墳形が方墳で石棺式石室の伊賀見1号墳と同じく石棺式石室の下の空古墳が考えられ、さらに、山腹に穿たれた才横穴群や女ノ峰横穴は古墳に比較すると簡単な造りといえよう。副葬品についても同様であり、遺物が現存する伊賀見1号墳（耳環、直刀、刀子、鐵、須恵器）と才横穴群（須恵器）、女ノ峰横穴（鐵、刀子、須恵器）では伊賀見1号墳が優っているのである。これより椎山1号墳、伊賀見1号墳・下の空古墳、横穴には何らかの社会的な差が認められる。椎山1号墳の被葬者は白石地域にとどまらず、

後の穴道郷（穴道町西半地帯）一帯を支配していた首長であり、伊賀見1号墳、下の空古墳のそれは、椎山1号墳に次ぐものである。伊賀見1号墳や下の空古墳の被葬者は同道川流域をその政治的、経済的な基盤とし、石棺材に多用された来待石（凝灰岩質砂岩）の搬出・加工に携った工人集団を統率していた首長とも考えられる。

一方、横穴に葬られた人々は前述の首長に隸属していた有力家族の構成員である。彼らは古墳時代中頃に経済的に自立し、その後、この地域の農業生産や土木事業などを主体的に担っていったのである。しかし、それらの活動を支えた大多数の下層農民の墓は今日どこにも残っていない。

733年（天平5）に作成された『山雲国風土記』の意宇郡穴道郷に載る大穴持伝承は、この頃の人々の精神構造を垣間みせているのかもしれない。
（西尾克己）

『山雲国風土記』意宇郡穴道郷条（加藤義成『校注山雲国風土記』より）

穴道郷。郡家の正西37里なり。所造天下大神命の追ひ給ひし猪の像、南の山に2つあり。1つは長さ2丈7尺、高さ1丈、周り5丈7尺。1つは長さ2丈5尺、高さ8尺、周り4丈1尺。猪を追ひし犬の像、長さ1丈、高さ4尺、周り1丈9尺。其の形石となりて、猪と犬とに異なることなし。今に至りても猶あり。故、穴道と云ふ。



図2 白石地域遺跡分布図 (1/25000)

1. 椎山古墳群（白石字下倉）

椎山古墳群は白石の谷が奥に屈曲しながら細長く入り込む、そのほぼ中ほどにある。谷の入口からは向かって右側の低丘陵上に立地し、前方後円墳1基、方墳3基からなっている。

前方後円墳である1号墳は、丘陵の最高部を占地し、そこから北東に延びる尾根筋に向かって2号墳が、さらに離れて近接する3号墳、4号墳が位置する。各古墳間の比高は、1号墳から2号墳にかけて10m、2号墳から3号墳にかけて5m、3号墳から4号墳にかけて1mと、次第に下っていく。

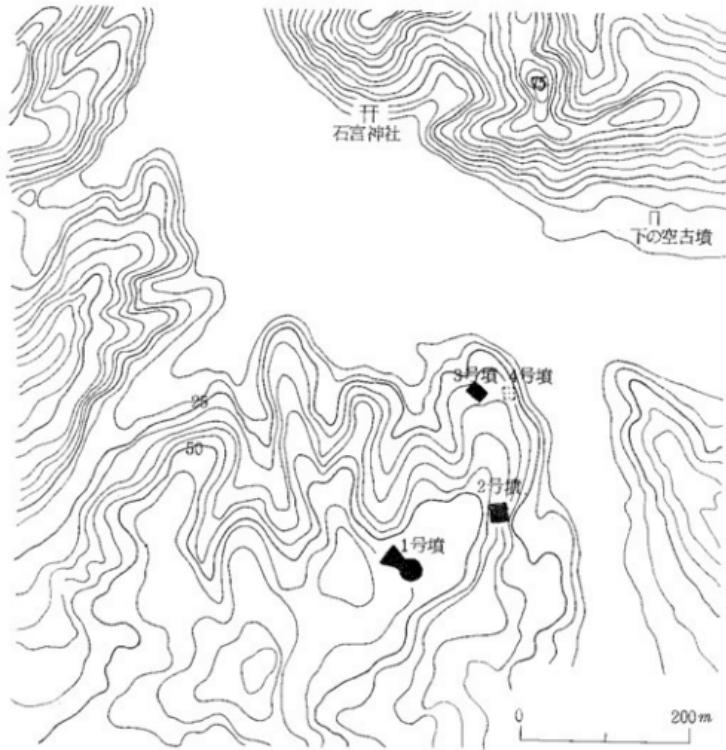


図3 椎山古墳群分布図

1号墳

1号墳は他の古墳より南西方向へ約100m離れて所在する。墳丘は、この丘陵頂上のかなり広い平坦面上に築造されている。従来は、当古墳を前方後方墳とする説と、前方後円墳とする説があったが、今回の実測の結果図5に見られるように前方後円墳であることが確実となった。

規模は全長36.0m、前方部先端の幅19.0m、前方部高さ3.5m、くびれ部幅9.0m、後円部直径18.0m、後円部高さ5.5mをはかる。ここで前方部先端の幅：前方部長さ：後円部直径の比は、約1:1:1となっていることがわかる。主軸は北北西に向かって、白石の谷から小さく西に入り込む水田を見下す。古墳の周りは南東から西にかけての部分を削土し、盛土に使用したようで、その部分は溝となっている。また、葺石等の外部施設は見当らない。

主体部は過去に盜掘にあっており、盜掘痕が前方部に2ヶ所、後方部に1ヶ所認められる。後円部、盜掘痕のまわりには、幅40cm、高さ約30cm、長さ約50cmの直方体の加工石が2、3散在している。また、近くの民家の土蔵の基礎にもいくつかの同様の石が使用されているが、これらの石の加工状態、數等から、主体部は横穴式石室だった可能性が強いと思われる。出土遺物は、これまで発見されていなかったが、今回の調査中後円部の南東隅から埴輪片が表採された。（図4）

一条のしっかりとしたタガを残し、断面は台形を呈している埴輪片は円形の透しの一部を留めている。調整は、外面がタテ方向の粗いハケ目、タガの周りをヨコナデ、内面が指頭圧、指ナデと一部ハケ目が認められる。色調は淡褐色を呈し、胎土は密、焼成も堅い。

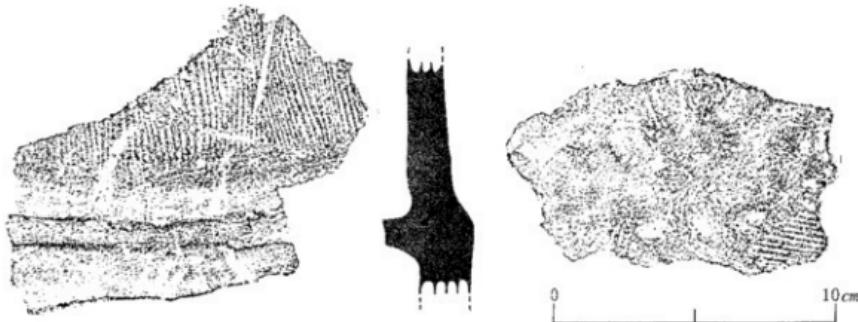


図4 1号墳出土埴輪実測図(1/2)



图5 椎山1号墳墳丘実測図(1/300)

2号墳

1号墳へ通ずる尾根沿いの小径を登っていくと、左手にこんもりとした高まりがあることに気づく。北東に向かって緩やかに延びる丘陵の中ほど、1号墳からは約100m離れて位置する方墳である。

墳丘は、裾部で長辺16m、短辺15mを測り、北側で高さ4mの規模をもつ。墳頂には時期を新しくして掘り込まれた落ち込みがあるが、4.5m四方ほどの平坦面をつくる。周囲の表面的な観察では、周溝などは認められず、また、丘陵を大きく切断して削り出した形跡もないことから、かなりの部分盛土により墳丘を形づくっているものと考えられる。

外部施設としての埴輪、葺石などを付した痕跡はなく、また、遺物も不明である。内部主体については、他のこの種の古墳に比べ、比較的高さを有していることからすれば、あるいは横穴式石室をもつ可能性もある。

3号墳

2号墳からは、北方向に120m離れて位置する方墳である。規模は長辺12m、短辺11m、高さ3.5mである。墳頂には約4.5m四方の平坦面をもつ。外部施設、遺物等は明らかでない。内部主体も不明であるが、規模等からして木棺直葬かと考えられる。

表2 出雲における後期前方後円(方)墳一覧(横穴式石室を内部主体とするもの)

名 称	墳 形	全長 (m)	後円部(m)		前方部(m)		くびれ 部 (m)	備 考
			徑辺	高	幅	高		
1 妙蓮寺山	前方後円	49	25.0	4.5	22.0	7.5	?	家形石棺1
2 半 分	#	(40)	21.0	4.0	19.0	?	7.0	# 2
3 大 念 寺	#	84	(46)	6.5	?	?	?	家形・箱形石棺各1
4 蔽 仙	#	19	9.0	1.5	10.0	1.5	6.0	
5 椎 山 1 号	#	36	18.0	3.5	19.0	3.5	9.0	
6 薄 井 原	前方後方	50	30.0	4.5	23.0	3	18.0	石室2、家形・箱形石棺各1
7 岡田山1号	#	24	14.0	2.0	14.0	1.5	7.5	家形石棺1
8 御 崎 山	#	41	23.0	3.0	17.0	2.0	?	家形石棺2
9 古 天 神	#	25	?	?	?	?	?	石障1
10 穴 観 2 号	#	29	14.5	2.0	14.5	0.75	7.25	

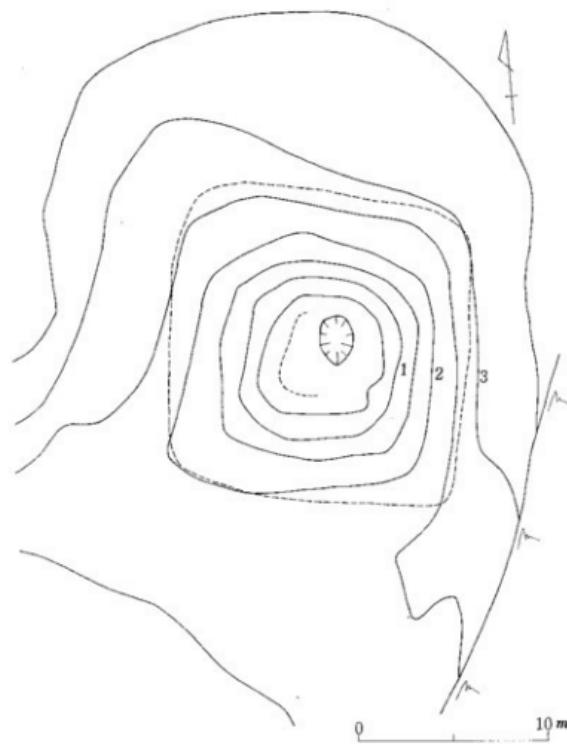


図6 椎山2号墳墳丘実測図(1/300)

4 号 墳

3号墳からはさらに20m東に存在する方墳である。尾根の中ほどではあるが、古墳群中最北端に位置し、比高も最も低い。墳丘はその大半が削りとられ、原形を大きく損ねている。裾部は僅かに残り、隣りあう2辺を留めている。南側で6m、東側で8mを測る。外部施設、内部主体、遺物等不明である。

(飯国芳明、鳥谷芳雄)

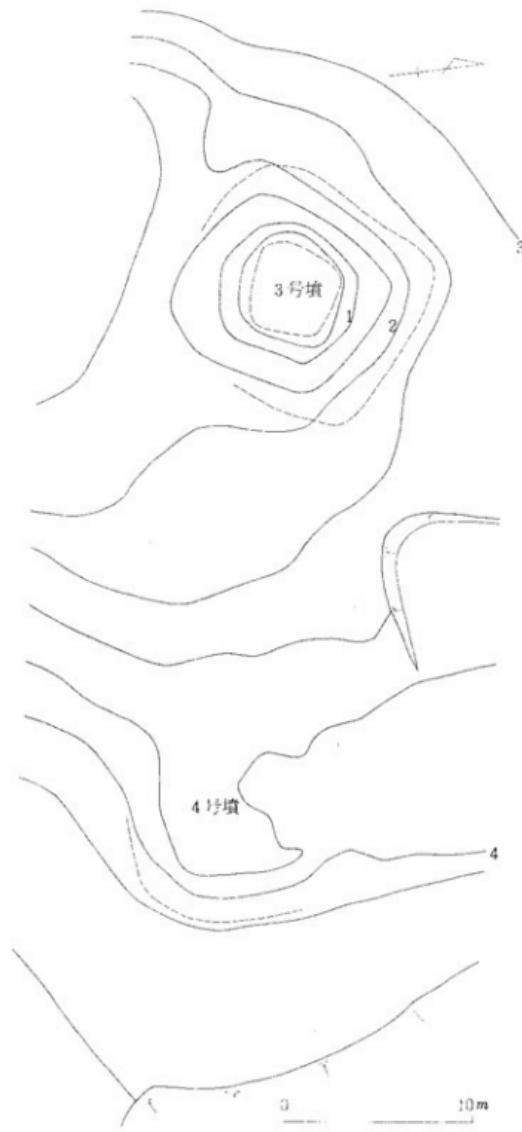


图7 推山3、4号墳墳丘实测图(1:300)

2. 伊賀見古墳群（下白石通称伊賀見）

白石の谷、現在の宍道湖から 300 m 南へ入った東側低丘陵の尖端部近くに存在する古墳群である。東から 1 ~ 4 号墳と略称し、1958 年に山本 清氏によって発掘調査された 1 号墳を中心に説明していく。

1 号 墓

小形の方墳で丘陵の両端を削り墳丘を築いている。水田面からの比高は約 20 m である。

規模は東西 12 m × 南北 11 m、高さ 2.5 m ほどで埴輪・葺石は認められない。墳丘は地山加工壇と盛土とから築かれているようである。

内部には複室の石棺式石室をおき、羨道は玄室の方向に対してややかたむいているが、玄室の開口方向はほほ南である。前後の玄室は共に切石で各壁を構成するが奥壁や前室側壁は、複数の石を組みあわせている。奥室、前室、羨道の長さはほほ等しく、また奥室幅は前室幅の約 2 倍であり、奥室の高さもその長・幅に近似する。

奥室の規模は長 1.8 m、幅 1.91 m、高さ 1.68 m で、各壁はほほ等しく内傾し、断面台形状を呈する。中央には南北方向に高さ 4.7 cm、くり込み幅 7.7 cm の障屏を設けていて、遺物の出土状態から、東側に遺体を置くべく奥室を区切ったものであることが推測される。



図 8 伊賀見古墳群配置図

また、床には4枚の切石をすき間なく詰めて、本来の石棺式石室を意識している。天井石は厚さ4.5cmほどで内面は平坦面にし、外面は蒲鉾形を呈する。

前室との境をなす壁は厚さ3.5cmほどで、西側に寄った位置に高5.7cm、底辺6.8cm、上辺5.7.5cmのくり抜きを設け、戸受けの切込みを施して、厚さ1.2cmの切石で陽刻をもつ閉塞石を入れるべき構造をなしている。門状の陽刻は、やや下に位置し、断面は台形をなす。上下3.8cm、左右4.8cmをはかる。前室はこの西に偏った奥室入口から少し傾いて設けられている。東側壁は大小4枚、西側壁は3枚、床石は3枚の切石からなり、天井石は1枚で、羨道との境をなす壁に組み合せられている。各壁は奥室同様内傾する。規模は長1.6m、幅9.5cm、高1.2mである。前室と羨道との境は1枚の大形の厚さ2.2cmの切石によって閉塞されており、羨道から前室をおさえたようになっていて、羨道構築後はそれを解体しなければ前室へ入ることができない構造となっている。羨道部は西側室に切石を一部残しているが、その他は崩壊著しく不明である。

1958年調査の遺物出土状況は図11の如くで、調査者はすでに盗掘を受けていることをその状況から推測している。

埋葬者の数は不明であるが1体は奥室東側に南側を頭部にして埋葬された可能性が強い。

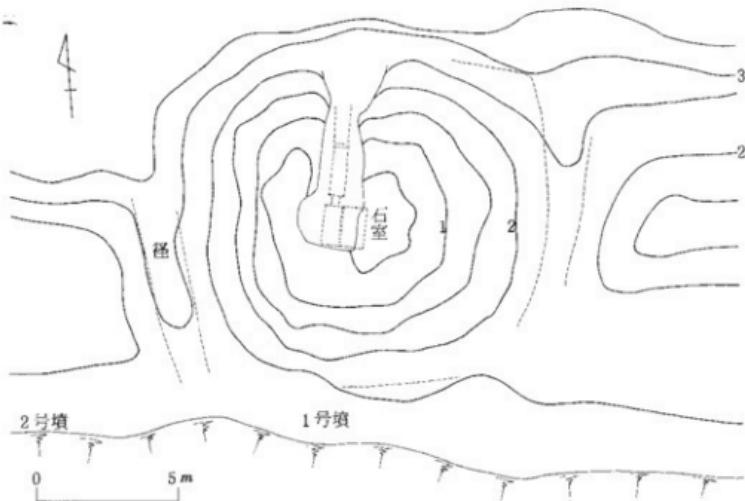


図9 伊勢兒1号墳填丘実測図(1/200)

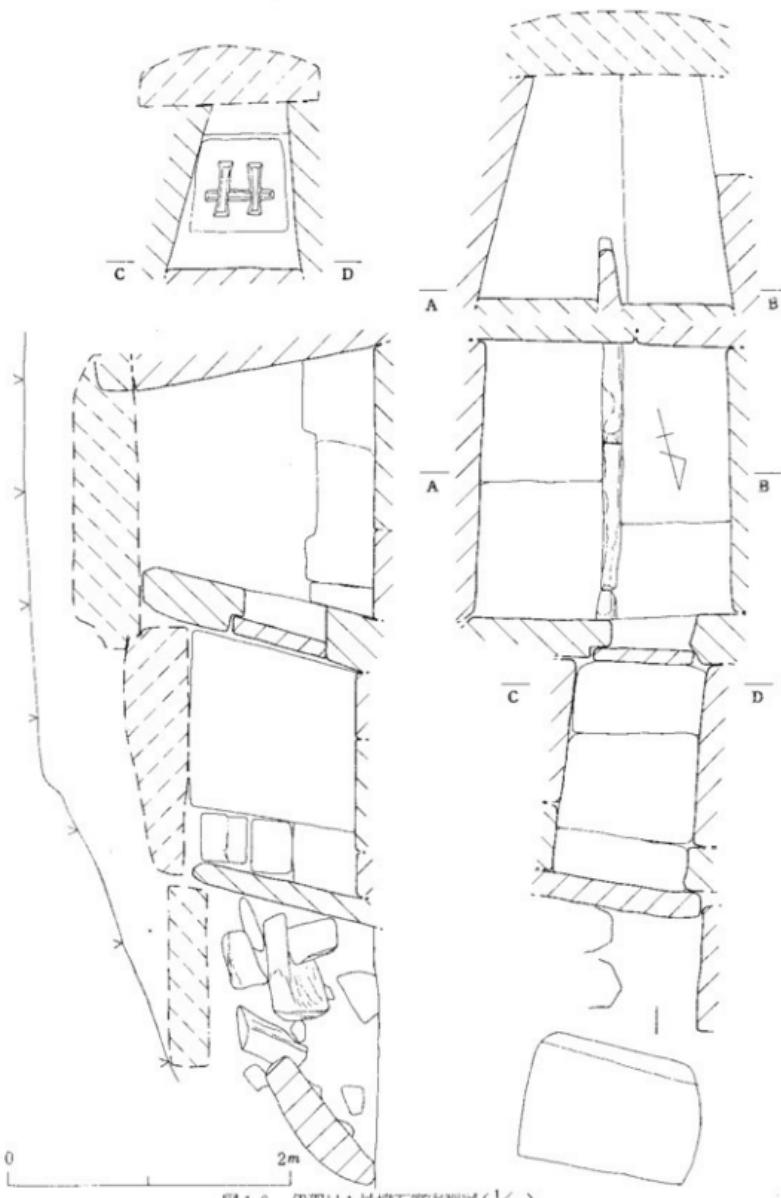


图 1.0 伊賀見 1 号 塵石室 大割図 ($\frac{1}{40}$)

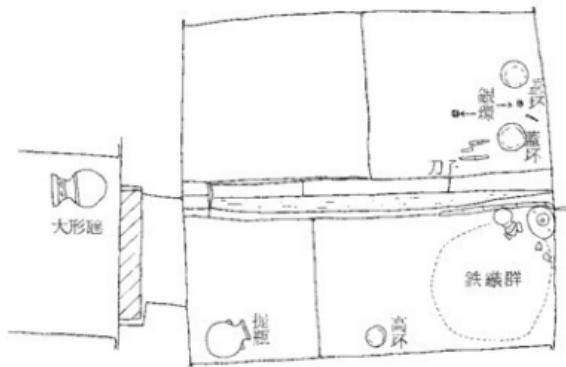


図11 伊賀見1号墳出土状況(『宍道町誌』より転載 1/20)

この古墳からは、『宍道町誌』によれば少なくとも30本以上の鐵劍が副葬されていたことが知られる。現在、宍道中央公民館に展示されているものは、6本を数える。

この6本についてみると、小さな鋒部をもち長い範被をもつもの1、3、4、5、と比較的大きな鋒部をもつもの6に大別できる。いずれも銹化が著しく詳細については不明であるが、全形がほぼ明らかな1、3、4について見れば、長さ2cm前後、幅1cm前後の鋒部をもつが範被の長さは、それぞれ8.1、5.2、5.9cmとまちまちである。これらの鐵はいずれも範被を経て突起状の棘をもち、茎にいたるものである。これらの鐵は全長が13cm程度の1と、15cm近くなる3の鐵の2種類に分かれるようである。次に6の鐵について見れば、長さ1.8cm、幅1.8cmと比較的幅の広い鋒部をもち、範被に統いてゆく。これら6本の鐵の鋒部はいずれも片丸造り、範被部断面は方形ないし長方形を呈し、茎も計測したものはいずれも正方形ないしそれに近い長方形である。

これらの鐵は、後藤守一氏の分類(注1)によれば1、3、4、5のものは有茎尖根式に属し、6の鐵は有茎平根式に属するものである。また、範被および茎の一部しか残存しない2の鐵も有茎尖根式に属するものであろう。

注1 後藤守一「上古時代鉄劍の年代研究」(『人類学雑誌』54-4 '39)

鉄刀は、石室内障屏西側より出土している。これは平造りのやや内湾する刀で、かなり銹化しているが、ほぼ全形を窺うことができる。残存全長8.30cm、残存刃身長7.26cm、刃幅2.6cm、背幅0.9cmである。鍔は、鉄製でやや長円形を呈し、欠失した部分もあるが、

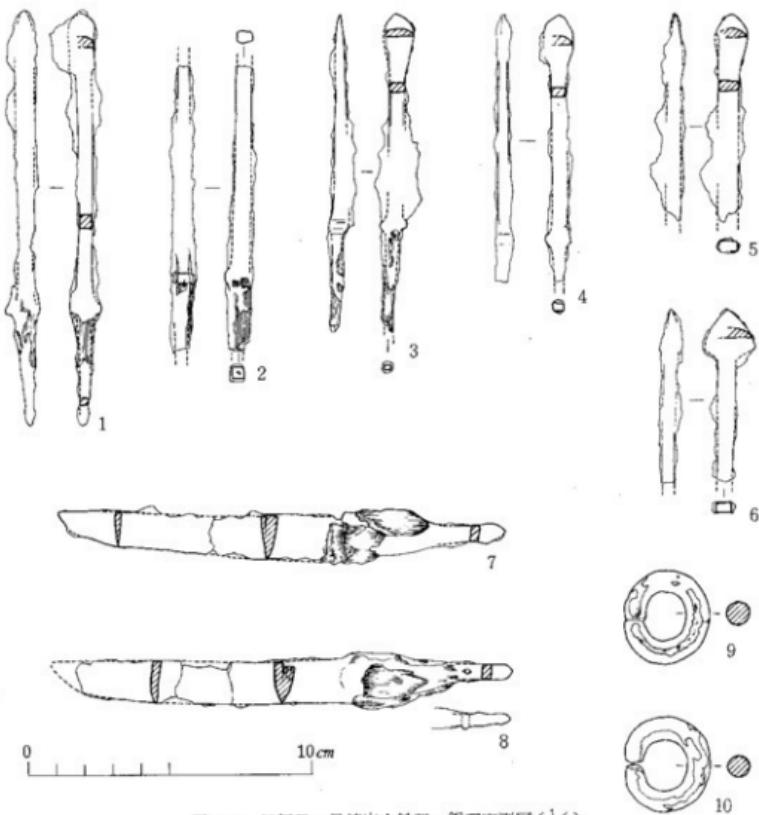


図1-2 伊賀見1号墳出土鉄器・銀環実測図(1/2)

6個の透しをもっている。また、鍔の内側には、やはり鉄製のはばきをもっている。長さ4.6cm、幅3.4cmである。茎は残存長8.6cm、幅2.0cmで2つの目釘穴をもっており、そのいずれにも目釘が残存している。鍔に近い目釘は、残存長2.1cmで断面は隅丸の長方形である。刀身部には木質の付着が認められ、古くは鞘をもっていたことが知られた。

この刀とは別個体であるが、喰出鍔のみが出土している。長径5.9m、短径4.3cmで断面は $0.8 \times 1.0\text{ cm}$ の長方形に近い多角形である。(図1-3)

他に銀環が2個出土している。地金の銅に鍍銀したもので、ともに長径3.3~3.4cm、短径3.0cmで断面は径約0.8cmの円形である。一对をなすものと考えられる。

伊賀見古墳出土の土器は須恵器のみで、『宍道町誌』によれば、奥室より聰1、提瓶2、高坏1、蓋坏、前室より大形聰1、また羨道部前方土中より甕の破片が検出されている。ここでは、聰、高坏、蓋坏、大形聰について触れる。(図14)

○蓋坏(1、2)

坏蓋は、口径12.5cm、器高は4.2cmである。体部と天井部の境には、1条の突帯をもち、その上下に1条ずつの沈線を施している。天井部にはロクロ回転右のヘラ削りを施す。焼成は良好、色調は青灰色、胎土はやや密である。

坏身は、口径10.9cm、受部径13.6cmで、器高は4.2cmを測る。立ちあがり部は、高さ1.2cmで内傾し、端部はとがりぎみに丸くおさめる。底部はロクロ回転右のヘラ削りで仕上げている。焼成は良好、色調は暗青色、胎土はやや密である。

この他にも、もう一対の蓋坏が出土しているが、ともに山陰の須恵器編年のⅢ期に含まれるものである。

○聰(3)

口径12.2cm、頸部径4.0cm、胴部径9.6cm、器高14.4cmであり、丸味をおびた肩部とやや丸味をおびた平底をもつ。口縁部は内湾気味に立ちあがり、端部で外反する。口縁下端部に断面三角形の突帯をもっている。胴部には径1.6cmの孔がうがたれている。頭部には2条の沈線がめぐらされ、その上部にはクシ状工具による波状文が描かれている。胴部には△方向のクシ状工具による刺突文帶がめぐり、この上に2条の沈線、下に1条の沈線がめぐっている。胴部下半は回転ヘラ削りで、ロクロの回転方向は左である。焼成は良好、色調は青灰で、胎土はやや密である。

○高坏(4)

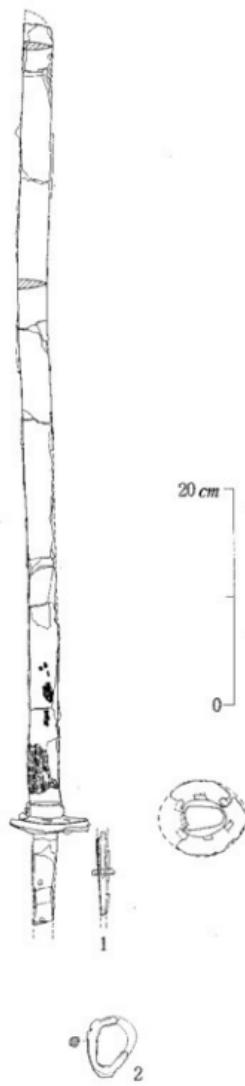


図13 伊賀見1号墳出土
鉄器尖頭刀(1/6)

脚部を欠失しており、全形は知りえないが、壺部口径 9.4 cm、同深さ 3.2 cm、脚基部径 2.9 cm である。体部は直立し、口唇は単純におさめている。体部下半に幅 1.2 cm の装飾帯をもっているが、ここに装飾ではなく、壺底部にクシ状工具による ↗ 方向の刺突文帯がある。脚部には三角形になると考えられる透しを三方にもっている。焼成は良好、色調は暗青色、胎土は密である。

○大形壺(5)

口径 1.6.9 cm、頸部径 9.6 cm、胴部径 2.2.3 cm、器高 2.7.0 cm で、肩部がやや張る体部をもち、底は尖り気味の丸底である。頸部は太く、口縁部は内湾気味に立ちあがり、端部で外反する。口縁の下端部に断面三角形の突帶を作り出す。また、頸部中ほどには一条の沈線がめぐり、その上にクシ状工具による波状文が複数めぐる。胴部には、径 1.4 cm の孔があがたれ、その上下に沈線が一本ずつめぐる。この 2 本の沈線の間をクシ状工具による波状文が一単位めぐる。胴部には格子状の叩きが施され、内面には同心円状の叩き目

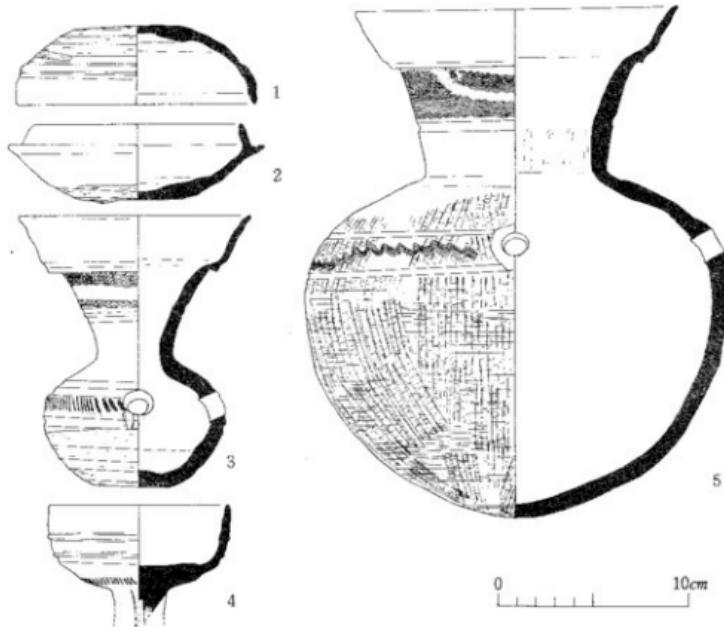


図 1-4 伊賀見 1 号墳出土土器一部実測図(1/3)

がかすかに認められるが、すり消されている。焼成は良好、色調は暗青色、胎土密である。

2 号 墳

1号墳のすぐ西側に近接して築かれた方墳である。規模は約 $6\text{ m} \times 6\text{ m}$ 、高さ 1m 以上で、1号墳と平行している。墳丘は地山を加工して盛土したもので、埴輪・葺石は認められない。

3 号 墳

2号墳から北西約 1.7m のなだらかな丘陵斜面にある。規模は $4.3\text{ m} \times 4.3\text{ m}$ 、墳丘北側の高さ 1.6m の方墳である。墳丘は斜面を利用して若干盛土しており、埴輪・葺石は認められない。

4 号 墳

3号墳から北西約 5.5m のなだらかな丘陵斜面にある。規模は $6.2\text{ m} \times 6.2\text{ m}$ 、墳丘北側の高さ 1m の方墳である。墳丘は斜面を利用して若干盛土しており、埴輪・葺石は認められない。
(赤沢秀則、大国晴雄)

3. 下の空古墳(白石字上白石)

上白石の高木武久宅の庭に存在する。宍道湖に延びる丘陵の斜面にあり、南から開いた二つの小谷が合う位置にある。前面に広がる水田からの比高は約 3m である。石室は東南向きの石棺式石室で、米待石を使用している。現在封土は消滅し、羨道部も除去されて多量の上がり、天井石が崩れ落ちたために石室全体がゆがんでいる。天井石は奥行 2.3m、幅 1.65m、厚さ 0.8m で、上面は四注式家形に整え、頂部に約 1.5cm 幅の平坦面がある。また前後の短辺には段を意識した加工がみられる。下面是丸く削り込んでおり、妻入である。石室は奥壁、左右の側壁とも一枚石を用いた組合式で、石の外面はまったく加工せず、内面は平に削っており、ノミ痕が残っている。右側壁にもわずかにみられるが、左側壁には奥壁と組み合わせるための削り込みがあり、側壁がかなり石室内側に傾斜するものである。天井石を受ける側壁の上端の平面形は奥行き約 1.7m、幅 1m あり、底部は土のために明確ではないが、奥行き約 2.5m、幅 2m 程度と思われる。

前壁の一部が石室の正面付近に残存している。復元すると玄室への入口の左右に閉塞石を受ける削り込みのある柱状の石を立て、その上に桁状の石を置くものである。閉塞石は高さ 1m、上辺 0.7m、底辺 0.8m、厚さ 0.18m の梯形に削ったもので、表面に門状の陽刻が施してあるのが特徴である。下の空古墳は古くから露出していたものらしく、出土遺物に関しては不明であるが、石室の構造等から古墳時代後期、6世紀後半～7世紀前半頃の所産と推定される。
(片山 泰輔)

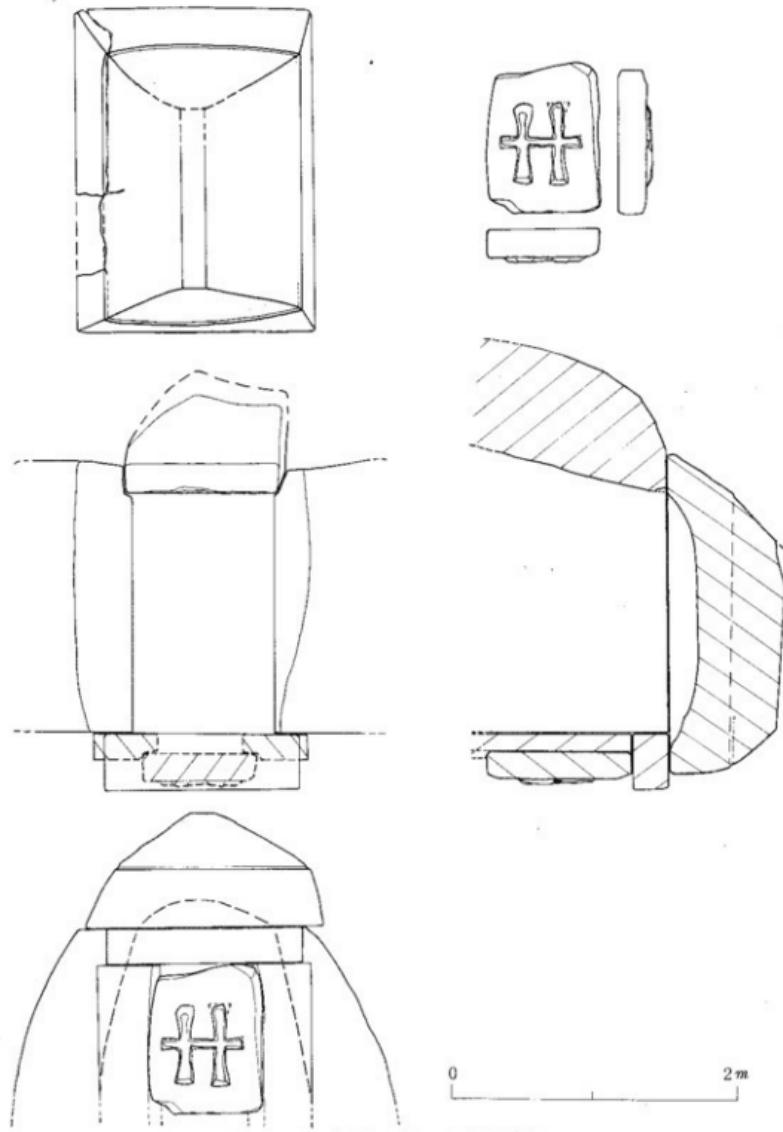


図15 下の空古墳石室復元実測図(1/40)

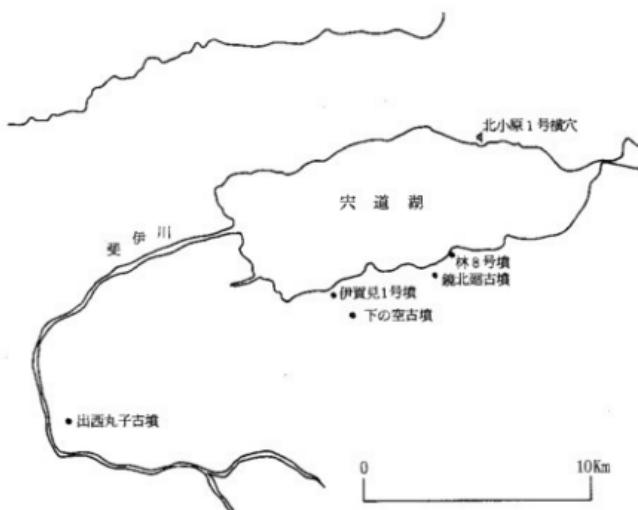


図16 閉塞石に門状陽刻を有する古墳分布図

表3 閉塞石に門状陽刻を有する古墳一覧

	名 称	所 在	墳形(規模)	内部構造	文 献
1	出西丸子古墳	簸川郡斐川町出西	円墳か(径10m)	石棺式石室	『斐川町史』
2	伊賀見1号墳	八東郡穴道町下白石	方墳(12×11m)	〃	『穴道町誌』
3	下の空古墳	〃 上白石	不 明	〃	〃
4	鏡北廻古墳	〃 東来待	方墳(13×10m)	〃	『松石古墳群』
5	林8号墳 (岩穴平古墳)	八東郡玉湯町林	方墳(20×17m)	〃	『出雲玉作資料館年報1』
6	北小原1号横穴	松江市西浜佐陀町	——	横 穴	『鳥取県埋蔵文化財調査報告書第9集』

4. 荻古墳(白石字荻)

白石の谷の中程をぬけ、宍道湖に流れ込む同道川をはさみ、前述した伊賀見古墳群の反対側丘陵に存在する古墳で方墳と考えられる。丘陵が谷に向って急激に下り始める突端部中腹に立地している。標高約30m、水田面からの比高は約20mである。

墳丘は、盗掘と山道等のため一部原形を損ねてはいるものの全体として築造当時の姿をよく残しているものと思われる。規模は、長辺約12m、短辺約7m、高さ約2.5mと推定される。墳頂には、長辺約7m、短辺約4m程の平坦面を有する。丘陵斜面を削平した時に出た排土を盛土として利用したものと思われる。内部主体は木棺直葬と思われるが詳細不明である。遺物としては多量の須恵器甕片が発見された。墳頂を盗掘した際に取り出されたものと思われる。

図18-1は緻密な胎土を用い焼成も良好である。灰色を呈し口唇部には自然釉がかかる。2はクシ状工具による波状文が1条みられる。3はクシ状工具による波状文が2条みられ、色調は灰色で自然釉がかかる。4は胎土に小粒の長石を少量含み、灰色を呈す。波状文と沈線文が残る。他に内外面にタタキ目をもつ甕底部がある。

(石飛公士、稻田 信)

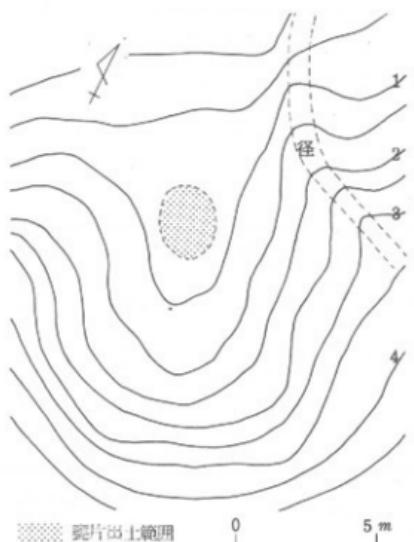


図17 荻古墳墳丘実測図($1/200$)

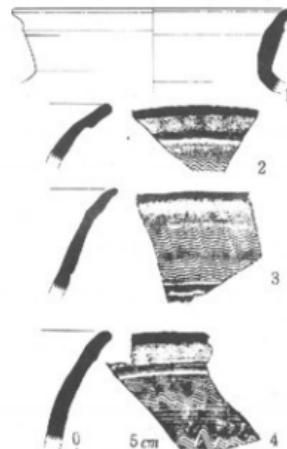


図18 荻古墳出土土器実測図($1/4$)

5. 才横穴群(白石字才)

宍道駅付近から南に向って入り込む谷が2つに分岐した内の西側の谷の最奥部に位置する。標高約20m、水田面からの比高約5mを測る丘陵突端部斜面に立地する。

今回の分布調査によって新しく2群の存在が確認されたため、現在では3群によって構成されている。北から順にI～III群とする(『宍道町誌』では、ここでいうI群のみが報告されている)。I・II群は同丘陵上に存在し、III群はI・II群の存在する丘陵と道路を隔てて東側の丘陵に位置する。群間の距離は、I～II群が70m、II～III群が100mである。遺物は各群とも須恵器が発見されている。

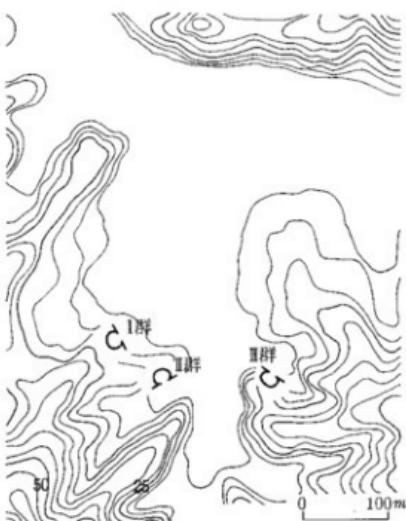


図19 才横穴群分布図

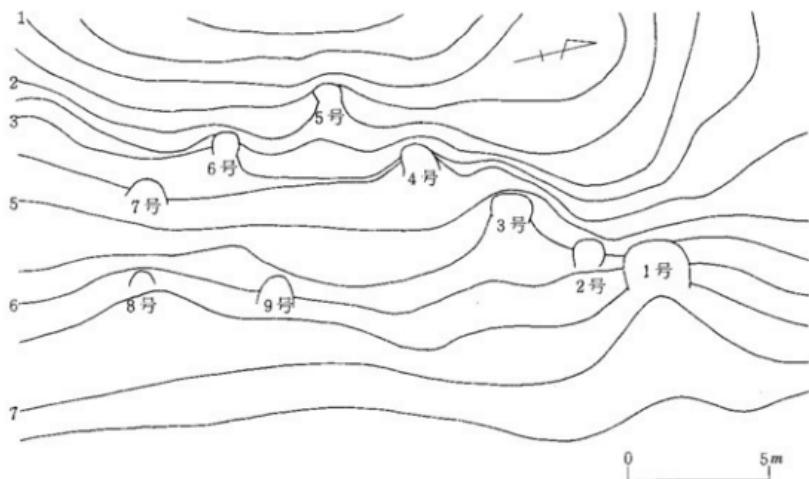


図20 I群横穴配置図(1/200)

第 I 群

北に延びる比較的なだらかな丘陵先端部の東斜面に立地する。現在 9 穴が確認されており、およそ幅 20 m、高さ 4.5 m の範囲内に 2 ~ 5 m の間隔をおいて開口している。8 ~ 9 号穴を除くと、5 号穴を最高所として「へ」の字状に並んでいる。

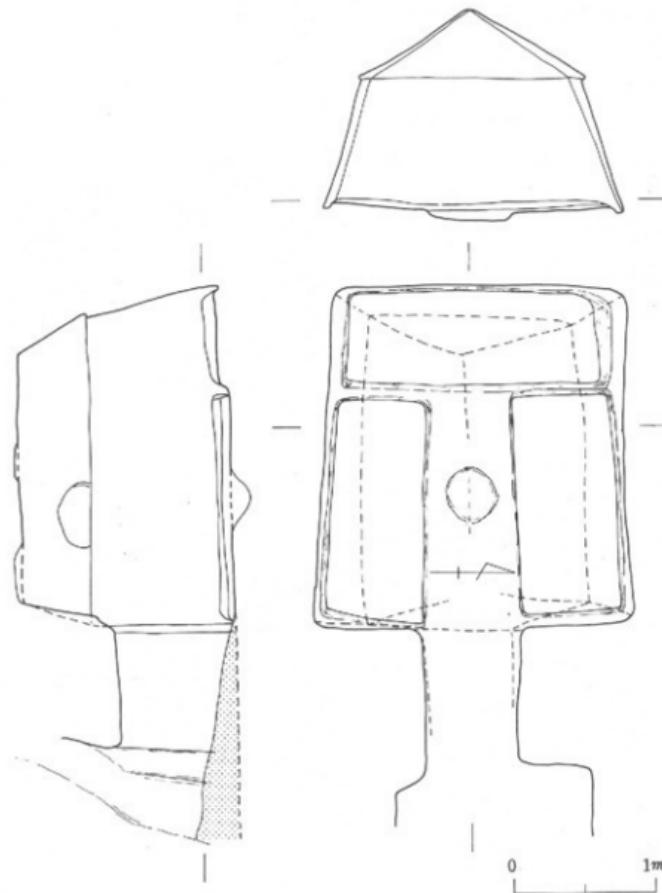


図 21 I群 1号穴実測図 ($1/40$)

1号穴

最も北に位置し、当支群中最大かつ特異な形態を示す。玄室は長さ2.4m、幅2.05m（奥壁側）～2.25m（玄門側）、高さ1.05mを測り、平面台形状を呈す。柱線、軒線ともに明瞭な妻入の整正家形をしているが、棟線はさほど明瞭でない。内には奥壁及び側壁に沿って3個の尻床が設けられている。奥壁に接している尻床が最も大きく、長さ1.90m、幅0.75m、高さ0.05mを測る。側壁に接しているものは、ほぼ同じ大きさで、長さ1.60m、幅0.75m、高さ0.05mを測る。なお、床中央及び、天井南側には盗掘孔と思われる穴がある。羨道は長さ1.00m、幅0.65m、高さ0.85mと細くて長い。遺物は不明である。

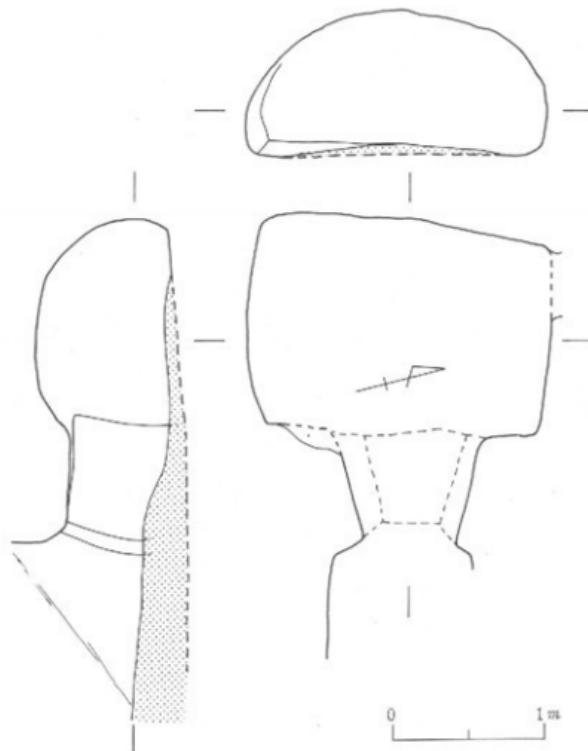


図22 1群2号穴実測図(1/40)

2号穴

1号穴に隣接している。玄室は、長さ $1.22m$ （北側壁）～ $1.32m$ （南側壁）、幅 $2.0m$ 、高さ $0.94m$ を測り、平面はややゆがんだ横長の長方形を示す。柱線は明瞭であるが、軒線ではなく、丸天井である。屍床などの施設はない。羨道は長さ $0.7m$ 、高さ $0.75m$ 、幅は 0.6 ～ $1.0m$ と羨道に近づくにしたがってせばまる。閉塞施設は明らかでない。前庭部ははっきりしないが幅が $0.9m$ 以上あることがわかる。遺物は不明である。なお、北側壁には盗掘孔と思われる穴があり、1号穴と通じている。

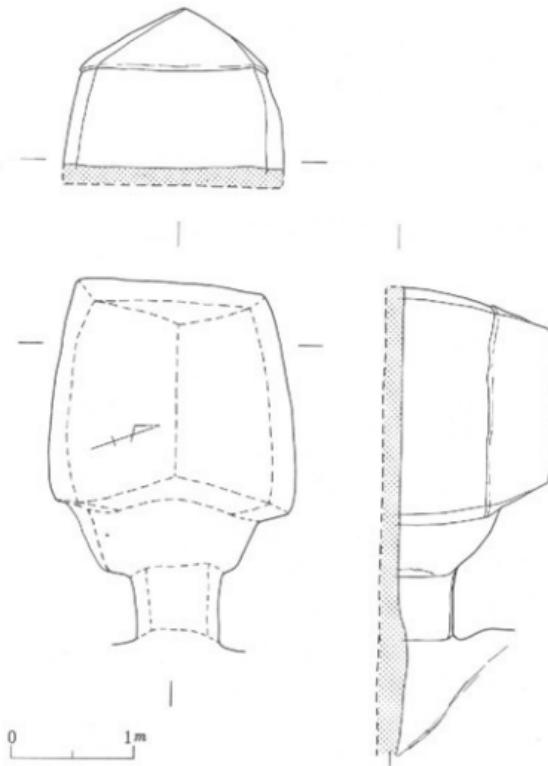


図2-3 1群4号穴実測図(1/40)

4号穴

玄室と羨道との間に小前室ともいべき施設を有する特異なものである。玄室は妻入で、柱線、軒線とも明瞭な整正家形を呈している。ただ、1号穴と同様、棟線はあまり明瞭でない。平面は玄門側を底辺とする台形を示す。規模は、長さ1.9m、幅1.55m～2.00m、高さ1.40mを測る。屍床などの施設はない。羨道は、前方が破壊されているが、幅0.7m、高さ1.6mを測る。小前室様の施設は長さ0.5mを測り、羨道に近づくにつれてせばまる。遺物は不明である。

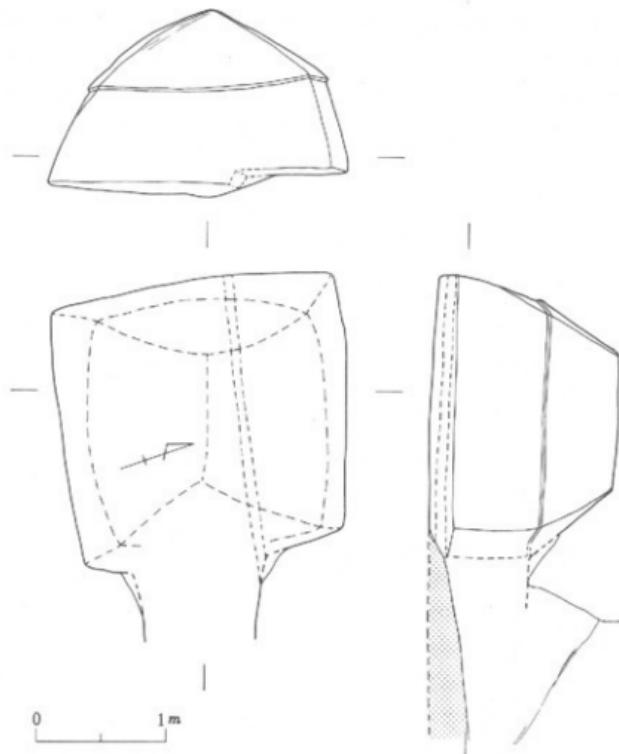


図24 1群6号穴実測図(1/40)

6号穴

玄室は、長さ2.1m、幅2.0～2.2m、高さ1.45mを測り、平面はややゆがんだ縦長の長方形をしている。柱線、軒線とも明瞭であるが、棟線は不明瞭で、柱線はやや内傾し、便化した妻入の家形を示す。床面は、盗掘をうけ原形を留めないが、北側に尻床のあったことが確認できる。羨道部は破壊が著しく、高さが0.75mを測ること以外は詳かでない。遺物も不明である。

9号穴

玄室は、長さ1.85m、幅2.05～2.30m、高さ1.20mを測り、横に長い長方形の平面プランを示す。当横穴群中唯一の平入りで、天井部にハクリが認められるものの柱線、軒線とも明瞭な整正家形をしている。尻床などの施設はない。羨道は、高さ0.75m、幅は玄門付近で1.05mを測るが羨門に近づくにしたがってせばまる。遺物は不明である。

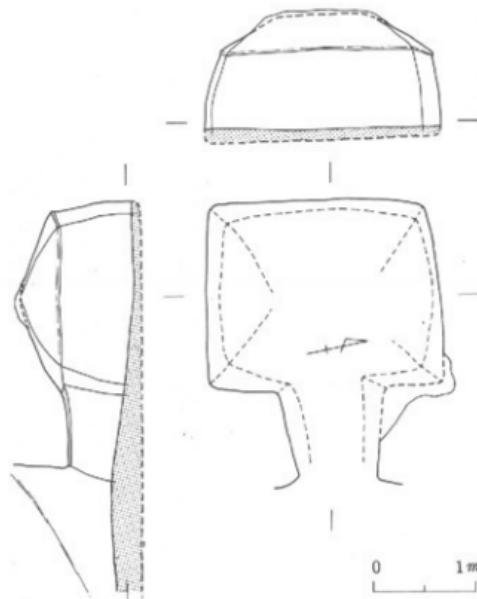


図25 I群9号穴実測図

〔才谷出土の須恵器(図26-1・2)〕

1は平瓶で、器高13.4cm、口径5.4cmである。頸部に2本の沈線がめぐり、口唇端は内凹みになり、内面には頸部接合痕をもつ。内外面とも回転などで、外面底部は回転ヘラけずりを施す。胎土は砂粒を少量含み、焼成普通、色調は灰色である。2は壺蓋で、口径12.5cm、器高4.4cmである。天井部と体部の境に沈線2本を施す。口縁の外面端部に幅約2mmの棒状工具による押圧痕がめぐる。天井部には回転右のヘラ削り、体部内外面とも回転で、天井部内面はなで調整、胎土は少量の砂粒を含み、焼成普通、色調は暗灰色である。

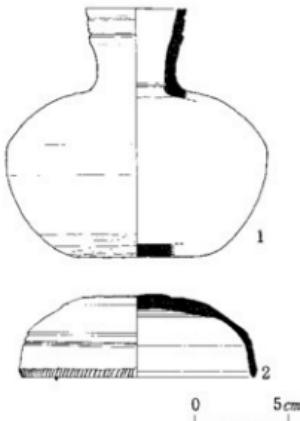


図26 才谷出土土器実測図(1/3)

今回新しく発見された群であり、1群から南東方向へ70mの所に位置する。丘陵南側斜面に穿たれており、2穴が開口していた。東側から1、2号穴とする。

1号穴

玄室、羨道とも土砂が流入しているが保存状態はよい。ほぼ真南に向って開口し、天井は妻入り形式で、明瞭な界線をもつ整正家形を呈する。規模は玄室が、奥行1.6m、幅2m、高さ1.2mで横長の方形プランである。羨道は、奥行1m、幅0.6m、高さ0.7mで、玄室との比較において長い羨道といえる。前庭部は埋っているため詳細不明である。遺物は発見されていない。

2号穴

1号穴から西へ数mの所に位置し、開口方向はほぼ南である。玄室天井部は風化が激しく棟の線は確認できないが、平入り形式で界線をもつ整正家形でていねいに加工されていたものと思われる。また、玄室の中央部と西側端には、ほぼ玄室中央付近まで溝が掘られている。規模は、中央部の方が幅6.0cm~8.0cm、深さ1.0cm~1.5cm、西側端の方は幅1.0~1.5cm、深さ5cm程度である。規模は、玄室が奥行2m、幅2.4m、高さ1.2mでこれも横長の方形プランである。羨道は風化が激しく、推定で奥行1.2m、幅0.8m、高さ1m程度と思われる。玄室・羨道とも1号穴より規模が大きい。1号穴と同様に前庭部については不明である。遺物は、高台付近の底部が羨道の床面から浮いた状態で表採された。

器表面および高台内側は回転ナデ、壺底部は、ナデで仕上げる。色調は灰色、焼成良好、胎土は密で、ロクロの回転方向は右である。(図28)

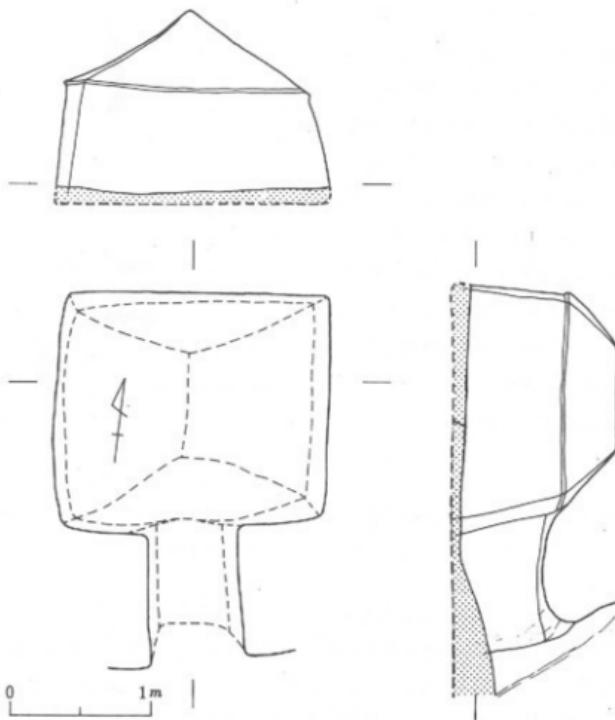


图27 Ⅱ群1号穴实测图(1/40)

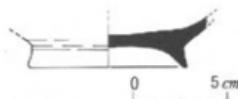


图28 Ⅱ群2号穴出土土器
实测图(1/3)

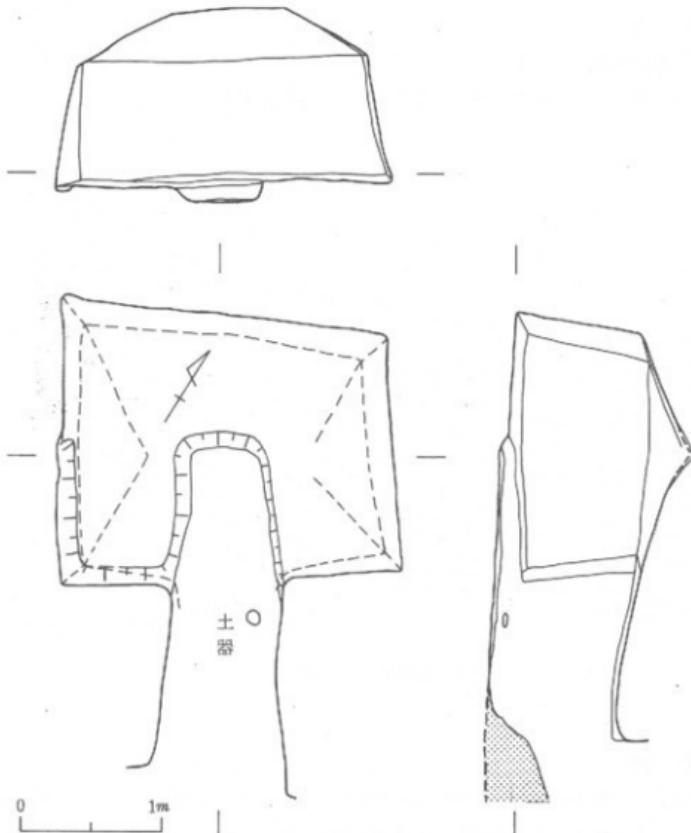


図29 Ⅱ群2号穴実測図(1/40)

第 III 群

この群も今回の分布調査で新しく発見されたものである。確認できたのは5穴(1穴は採土のためほぼ全壊)で丘陵北側斜面に穿たれている。東側から1~5号穴とする。この内、実測を行った3号穴から紹介する。

3号穴

3号穴は風化が激しく、また、かなりの量の土砂が流入しているため、規模をはじめとして詳細は不明である。開口方向はほぼ北である。遺物は発見されていない。

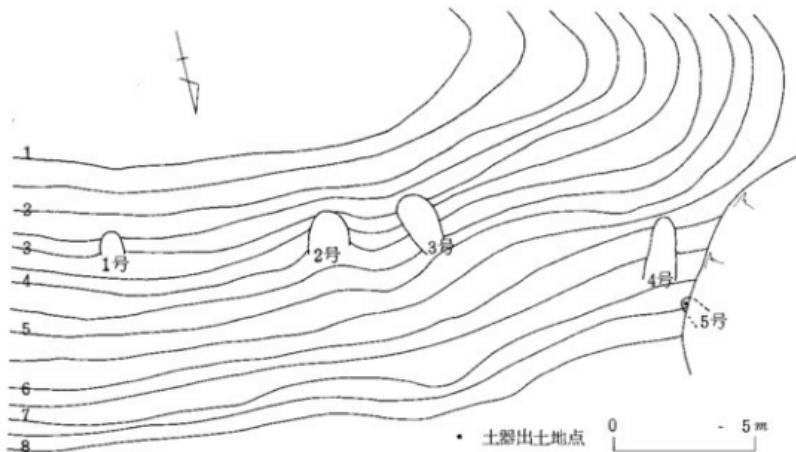


図30 ■群横穴配置図(1/200)

5号穴

5号穴は、この群中唯一遺物が発見された横穴である。現在は採土によって大きく削られ、奥壁の一部を残すのみでほぼ全壊し詳細不明である。遺物としては、その僅かに残った奥壁底面から平瓶（図32）が発見され、またこの平瓶の発見によって5号穴の存在が確認できたのである。以下、この平瓶について説明する。

淡青灰色を呈する高さ14.4cm、胴部最大径14.4cmの完形品である。頸部はやや外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部は直立する。胴部は丸味を帯び、上半部に極めて淡い緑色の自然釉が認められる。肩部～胴部下半部はカキ目で調整し、胴部下半部以下はヘラ削りで仕上げられている。浮文は認められない。

（石飛公士、中浜久喜）

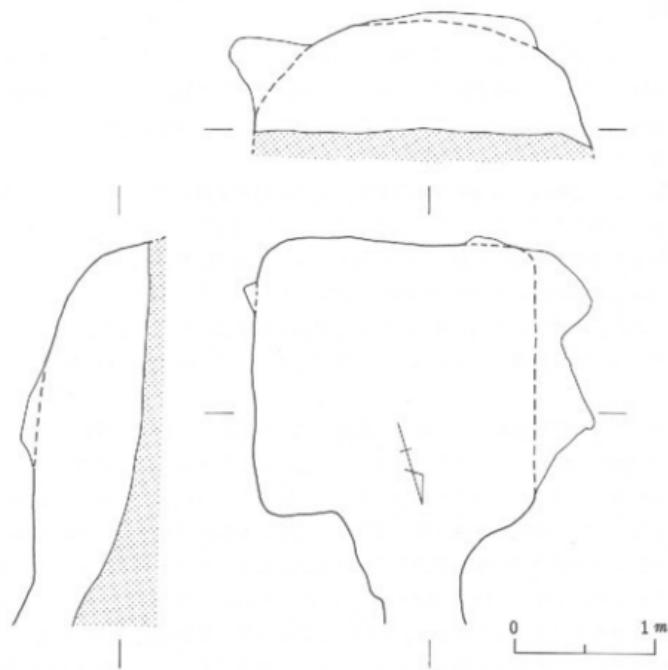


図3-1 Ⅲ群3号穴尖測図(1/40)

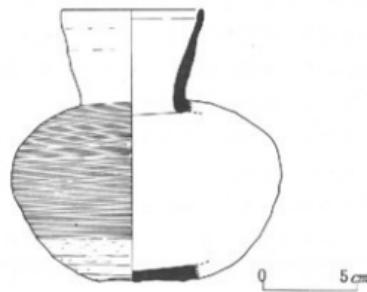


図3-2 Ⅲ群5号穴出土土器
実測図(1/3)

小 結

白石地域には、集落址・散布地といった種々の遺跡がまだ知られていない。これまで紹介してきた遺跡は、いずれも古墳・横穴である。確かにこうした墳墓からは、この地域の古墳時代の一端をかいまみることができるが、豊かな原始・古代の素描には充分でなく、資料の発掘が望まれている。

白石で現在最も古い遺跡は、古墳時代も後期に入った椎山古墳群と考えられるが、それまでの墓制は長く不明なままである。椎山古墳群は前方後円墳1基、方墳3基からなる。全長3.6mを測る1号墳は外部に埴輪(列)を施し、内部には横穴式石室を設けた可能性が強い。これは宍道湖周辺にある他の同時期の古墳と比しても劣らぬ規模・内容をもつものであり、この白石地域にも相当の勢力を有する被葬者が輩出したことを物語っている。他の2~4号墳も1号墳と前後して築かれたと推察されるが、それは凡そ6世紀後半でなかったろうか。

椎山1号墳にみられる被葬者は、この地域の首長と目されるが、それは伊賀見1号墳、下の空古墳にその後の系譜が迫れるようである。両古墳には妻入形式の石棺式石室と、閉塞石の「門」状陽刻という二つの大きな特色がある。石棺式石室は松江市を中心に出雲東部に多く分布する。特に、伊賀見1号墳は松江市古天神古墳と類似性が強く、石室内に石隙をもつこと、伴出の大形鏡やその他の須恵器が比較的古い段階のものであることなど、注目されるところである。また、「門」状陽刻は宍道湖周辺において現在6例を数えているが、その内の2つである。こうした点から、当時の出雲東部及び宍道湖周辺には共通した古墳文化圏が形成されていたことが窺われるが、これら被葬者相互には何らかの政治的統合があったことも想起されるのである。とりわけ「門」状陽刻の共有には石室製作にかかる技術者集団の介在があったのではなかろうか。白石地域が米待石の供給地にあたることも見逃がせないところである。伊賀見1号墳の時期は6世紀後半、下の空古墳は石室構造、「門」状陽刻の形式差などからそれより後出のものと考えられる。

一方、同地も後期古墳には、坪ノ内古墳、荻古墳といった小規模古墳や山腹に穿たれた才横穴群、女ノ峠横穴、OM横穴がある。これら横穴はほとんど出雲西部に多い妻入の整形家形及至はその便化した形をとっている。平入り形式の多い東部に対して、この地域は両者の接点にも位置している。これらの被葬者は前記の石室構造を有するものとは明らかな隔離があるが、その性格は必ずしもはっきりとしていない。才横穴群のように支群に分かれて存在するなど、確かに古墳に葬られる被葬者層には拡大があったことと推察される。それ以上に多くの民衆がいたであろうことは想像に難くない。こうした古墳の年代は概ね6世紀後半から7世紀前半であったと考えられる。

白石地域は、その後律令時代に入り、行政上では意宇郡に属し、「宍道郷」の名が付された。

II 久戸千体地蔵仏

1. 位置と環境

本遺跡の所在地は、八東郡穴道町東来待字久戸である。国道9号線から来待川沿いに南へおよそ500m入り込んだ谷間水田に面する低丘陵の西向き崖面に立地する。伊藤石材店の店舗と本宅の背後の丘陵にあって、尾根からほぼ垂直に約7mの高さで切り立った軟砂岩の所謂来待石の崖面を利用し水平方向に計112体もの地蔵菩薩立像を半肉彫りしたものである。仏像群はまず崖面の下部に高さ50~60cm、奥行15~25cmほどのくり込みを彫り、このくり込みの中に脚部を接してあるいは4~5cmの間隔をおいて配列されている。

仏像群は、くり込みの規模や区画から便宜上A~J区までの10区に分類出来る。以下A区から順を追って概述する。

2. 概 説

A区 6体から成る。錫杖を左手で持つもの2体以外は中央で印を結ぶものである。向かって左側3体は蓮弁の台座を有し像高45cm前後である。右側3体は台座をもたない。總高40cm。

B区 横幅1.7m、高さ1.1m、奥行0.85mの石窟である。向かって右側面は約20cmふくらみ左側の角の壁面には地蔵菩薩立像を1軀浮き彫りにしている。正面手前には高さ



図33 久戸千体地蔵仏の位置図(1/25000)

2 cmの浅い段を設ける。石窟の上部崖面には入の字形に水切りの溝がある。石窟中には、五輪塔の空風輪2個、火輪1個、水輪2個、宝筐印塔の笠6個、塔身5個、相輪3個が安置されているが、セット関係の不明なものが多い。中央後方には板碑が1個ある。ここで実測した板碑と宝筐印塔について簡単に述べておく。

① 板碑 総高5.8 cm、厚み1.1 cm。頭部は山形に加工され角は1 cm幅の面取りが施されている。本体は、横幅28.8 cm、高さ1.8 cmほどの不整形な來待石の上にえらされている。正面中央には「南無阿弥陀仏」、その上方と左右両側には梵字が刻まれているようであるがいざれも風化著しくてつまびらかでない。板碑としてはより簡略化された形式のものである。

② 宝筐印塔 総高140.8 cm、基礎は高さ19.2 cm、横幅26.4 cmを測る。上部には段が3段あり最上部の幅で23 cmと狭まっている。塔身は高さ18 cm、横幅18 cmと、ほぼ立方体であるが胴部は胴張りで中央部で8 mmほど外方へ張り出す。梵字の葉研彫りを刻む。笠は高さ22 cm。幅は隅飾りの下端で25.4 cmを測る。上部に4段、下部に3段の計7段の段階を設け、隅飾りは葉研彫りで曲線のふちどりを刻む。相輪は高さ41 cm、最大部の幅15.6 cm、最上部の幅13.6 cmを測る。頂部は円錐形となる。その他の宝筐印塔もほぼ同形式の類である。なお、この石窟の前の埋土中から宝筐印塔の相輪破片1個と地蔵菩薩立像の石仏破片2個体分が出土していることから石仏も又この石窟に安置してあったことがわかる。

C区 16体から成る。この内、錫杖を持つ地蔵は9体が確認される。中央で印を結ぶ仏像は3体が確認される。C-4の仏像は半跏像であるかもしれない。

D区 6体から成る。最も左側に位置する仏像は全て脚端部の位置が高く像高も45~50 cmと高い。D区のくり込みは高さ1 m、奥行25 cmあり、左右のくり込みに比べて高さが非常に高く独立した区画を有している。

E区 14体から成る。錫杖を持つもの6体を数える。仏像脚大の蓮の台座の彫刻がよく遺存している。

F区 風化著しく3体が確認されるものの詳細は不明である。

G区 6体から成る。錫杖を持った仏像1体の他は風化著しく詳細は不明である。右端に斜め方向の水切りの溝がある。

H区 30体から成る。錫杖を持つもの13体を数える。7~13番までは風化著しくわずかに遺存する台座部分によって確認される。H-10番は全く確認出来ないが左右の位置関係から1体分あったものと思われる。

I区 H区との間隔を約40cmあけてほぼ同レベルにて4体が彫られている。I-1～7番は風化著しい。錫杖を持つ仏像は16体が認められる。H区寄りにくり込みIまで続く水切りの溝が認められる。

J区 I区から2、3m離れ長さ2m、高さ50～60cmのくり込みの中に7体の仏像を彫り込んでいる。その内、錫杖を持つものは4体を数える。

3. 小 結

統計112体の仏像群についてA区からJ区までの10区に区画したわけであるが、これらの区画についてはそれぞれ何らかの意味があると思われる。この点についての角度から考えてみたい。まず各区における仏像の数量について考えてみたい。そもそも地蔵菩薩は釈迦の入滅後、弥勒仏が出現するまで56億7千万年の間に出現し六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）の衆生を教化救済する仏であるといわれる。何事も願いがかなう有難い仏様であることから、室町時代以後、庶民の間に地蔵信仰は急速に広まった。いわゆる六地蔵という形で、六体の石仏を並べて信仰する例が多いのはこのためである。

又、別に十三仏信仰というのもあって、追善供養のために13体の仏像をおがんだ。本石像群の場合、A区、D区、J区については6体から成立しているので一応六地蔵信仰にもとづくものと考えることが出来る。しかし、他の区では6又は13の数字にあてはまるものではなく、一体何に拠って彫刻する仏の数量を決めたのか全く不明というしかない。

次に発願者について考えてみたい。地元の伝承によれば、水田をへだてた西側の部落の長者の建立にかかるものとされているが、くり込みの深さや外郭線については隣接の区どうして差があり同時期に彫刻されたものではなく一定程度の時期差を考えなくてはならない。特にI区とJ区の間には、約2.3mにわたり荒い鉄棒様のものでくい込みを彫ろうとした形跡があり、ノミ痕が無数に残っていることから仏を浮き彫りにする中途の作業工程でそれが何らかの理由で中止せざるを得なくなってしまった事情を物語っている。このことからも、仏像群はそれぞれの区画を単位として、その製作年代に前後関係があることになる。

これが、長者の家で代々の主人が繼承して発願したのか、複数の人々が費用を出し合って彫ってもらったのかこれ又不明というしかない。

いずれにしても、全体の区画としては、石塔を納めたB区の石窟と、他より一段と大きい地蔵を彫り込んだD区の2つの区を中心にしてその隣接区に次々と仏像が彫り込まれていったものと思われる。その製作時期については地蔵菩薩信仰が盛んになる室町時代以後江戸時代までのことを推定される。

（岡崎雄二郎）

来待の磨崖千体地蔵について

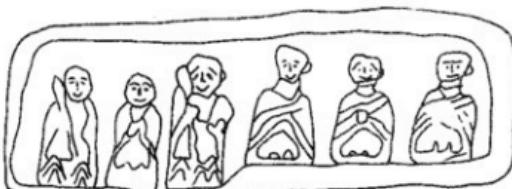
原 宏 一

来待の磨崖千体地蔵は、岩山の下部に百体をこえる地蔵像を浮き彫りにしていて、山陰の数少ない磨崖仏のなかで最も規模が大きい。まだ土に埋もれたままの地蔵像もあるといふことだが、百体以上も地蔵像があることから、千体地蔵とよばれるのであろう。しかし、この岩山への登り口正面にある石像は、地蔵像ではなく、それは伽藍神か、俱生神か、または造立者自身の像かのいずれかであると考えられる。この像の上の岩面には、何かを支えた穴が穿たれている。おそらく底があったのであろう。

磨崖仏とは、地中に根を張った自然の岩壁に、また地中から野外へ出た部分の岩面に仏像を刻みつけたものである。磨崖仏は奈良後期から始まり、平安期には東北から九州にかけて広く造られたが、山陰には鎌倉期から以前のものは見あたらない。この千体地蔵の造立は、400年くらい前の桃山期と思われる。あるいはもう少し古く空町期のかもしれない。また逆に江戸初期ということもありうる。造立年代は、千体地蔵に関する古文書でも発見されない限り確定できないのだが、この磨崖仏の姿から400年以前のものと見うけられるのである。山陰に現存する磨崖仏では、最も古いものに属している。

この岩山は来待石である。長い歳月を経てきた千体地蔵は、かなり磨滅しているが、彫り出された石仏はもとの岩山へ帰っていくような気がする。千体地蔵が彫られている岩山自体も、信仰の対象になっていたと思われる。

（原 宏一氏は詩誌『光 年』同人）



cut.

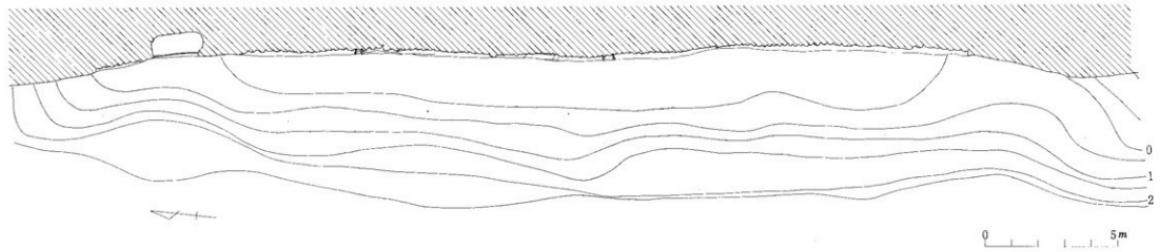
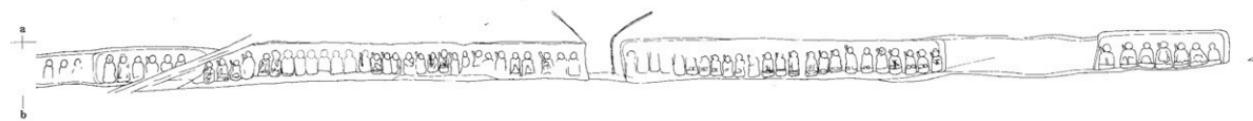
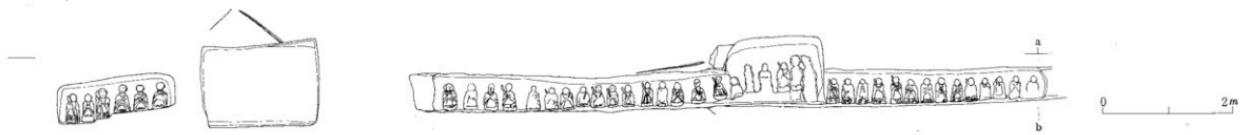


図3-4 久戸千体地蔵伝説圖

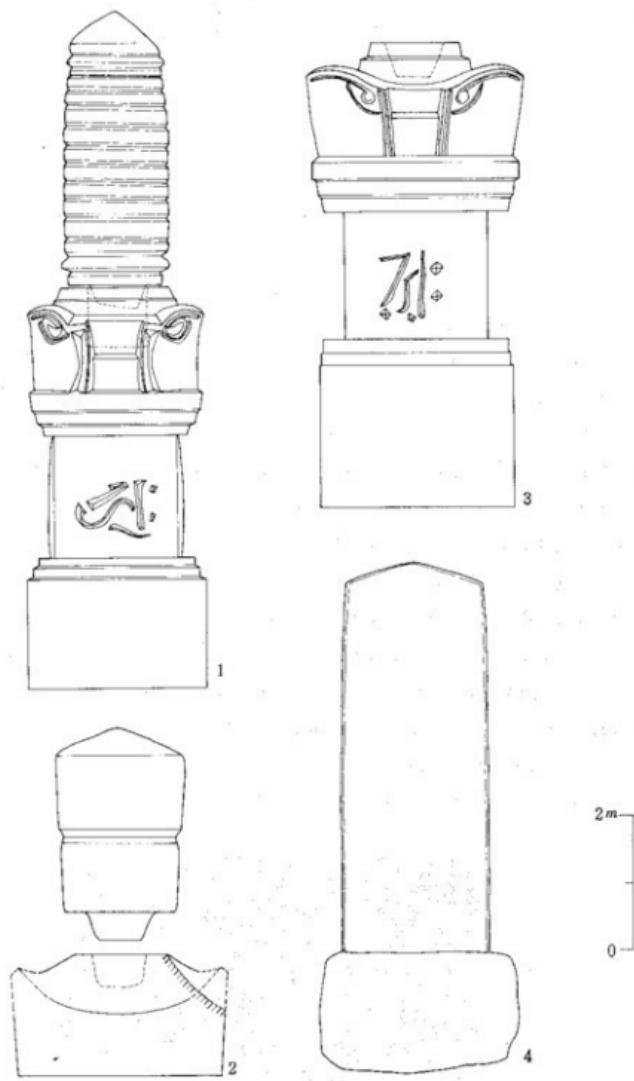


図3-5 石造遺物実測図(1/8)

(付) 地域と古墳と磨崖仏

つまり、古墳と磨崖仏を結ぶ（ないしは両者を包含する）ものとして地域を仮定したのである。

穴道町東来寺に所在した「松石古墳群」（「穴道町埋蔵文化財調査報告—松石古墳群—」）の発掘調査から4年が過ぎようとしている。私達（編集、執筆者等）の一部が穴道町の遺跡に少からぬ関わりを持ち始めたのは、この松石古墳群の発掘調査とその報告書の編集過程に行なった踏査・実測からであった。

以来、私達は町内の重要な遺跡を町指定史跡にする等、文化財（遺跡）保護に取組む穴道町教育委員会の熱意に支えられ、白石地域をその対象として微力ながらも調査を行なうことになった。その中間報告ともいえるのが本書である。

ところで、冒頭に述べたように私達は古墳と磨崖仏をとりあげたのであるが、卒直に言って、その両者（のみに留まるものではないか）を統一的に位置づけ理解するべき視点を今、もち合せてはいない。古墳とその時代、またその前後の動向、そして中近世における民間信仰ともいえる造立者達の精神構造やその性格等々、まだ尽きせぬ問題点が山積している。

白石のような最も小さい地域（小単位地域とでも仮称できようか）の遺跡を網羅し、一つ一つを紹介して、その地域の中での歴史的位置づけを明らかにしようとすることは單なる資料の紹介や集成にとどまらず、その地域の地域史像を再構成するための重要な視点になりうると確信している。

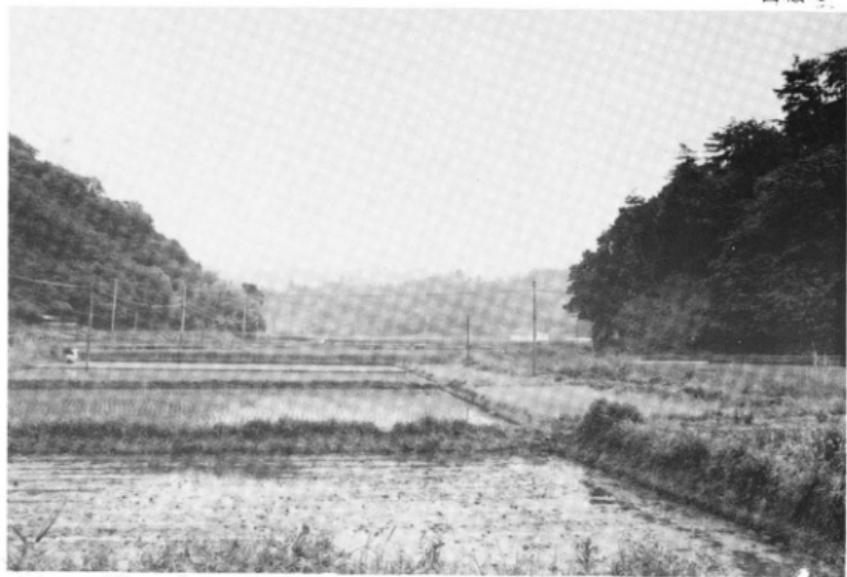
むろん、地域史は単に原始・古代史の部分においてのみ語りうればそれで良しとするのではない。また、上述の小単位地域のみに拘泥してはならないことは十分承知しているつもりである。現代につながりうる地域史。地域史の重層的な積み上げは常に意識しておくべきであろうが………。

ともあれ、かくの如き観点から本書は執筆・編集が決定され、今日に至ったものである。不十分ではあるが、これから私達と地域（穴道も含めて）との関わりの中で「地域と古墳と磨崖仏」を結合させたいものと考えている。

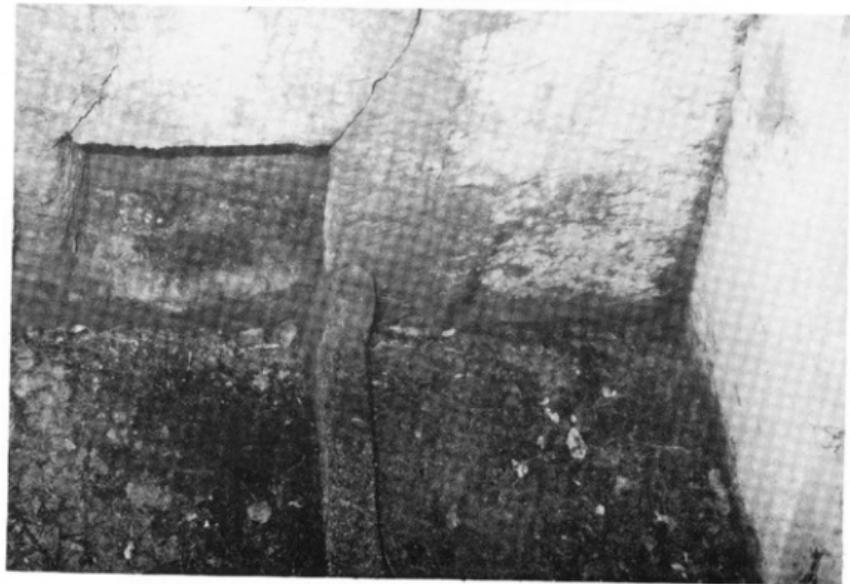


（調査風景
伊賀見二号墳）

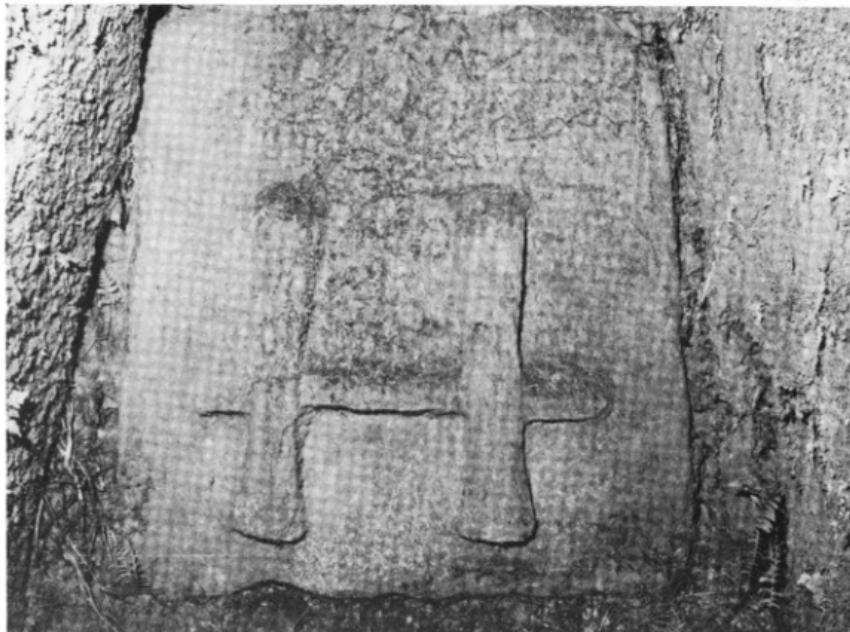
図 版



白石の谷（正面奥が椎山古墳群）

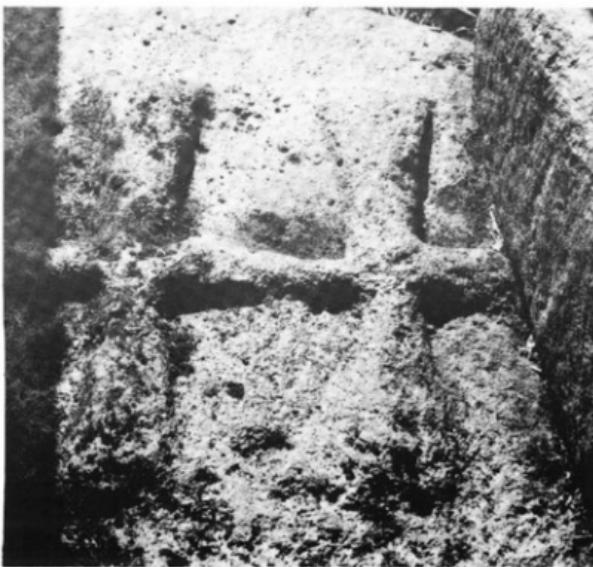


伊賀見 1号墳の玄室内部（玄門付近）



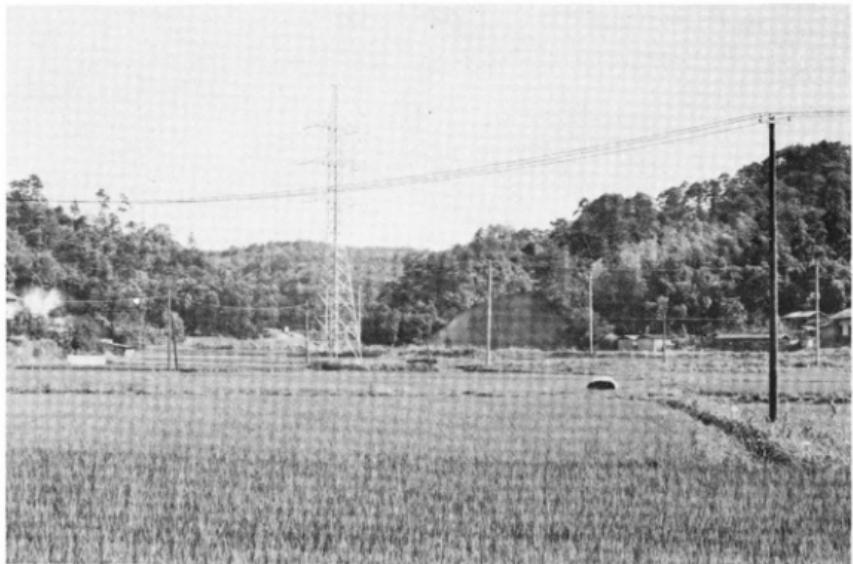
伊賀見 1号墳玄門閉塞石 ▲

下の空古墳玄門閉塞石 ▶

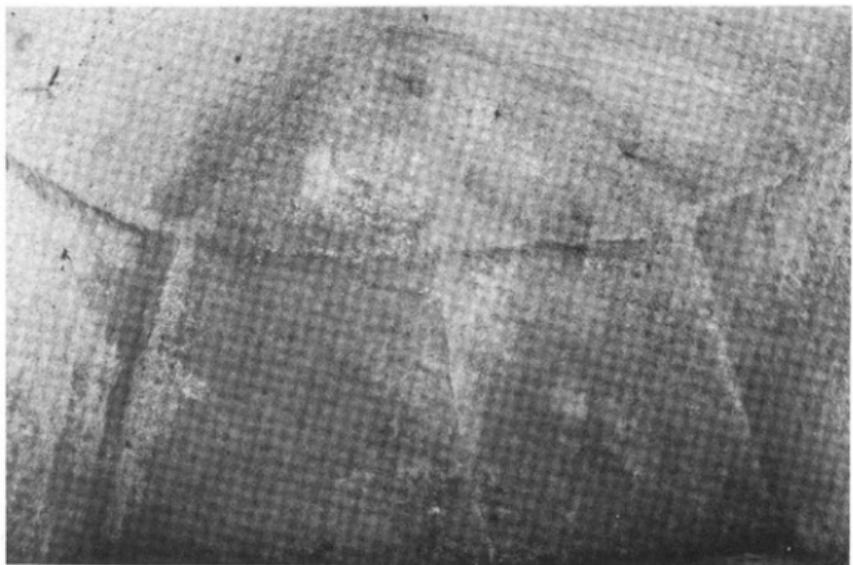




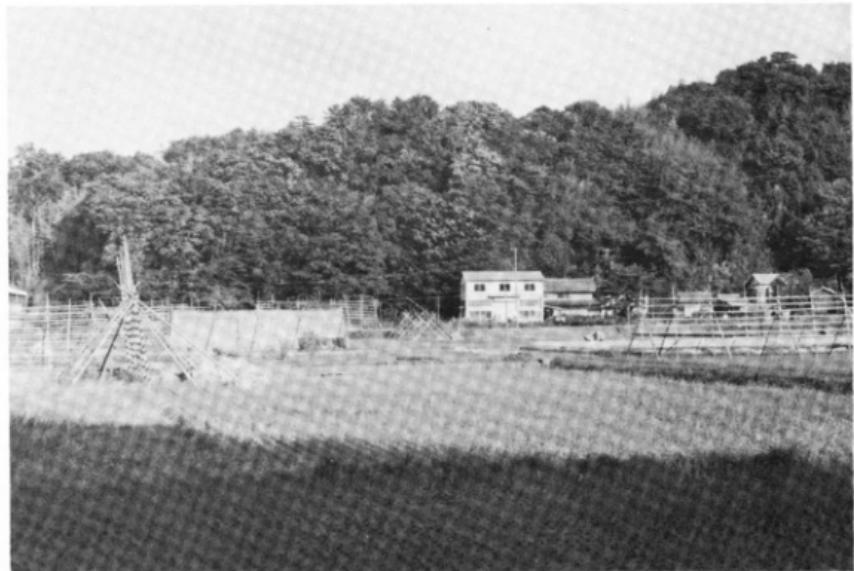
伊賀見 1 号墳出土の遺物（耳環、刀子、土器）



才横穴群遠景（左Ⅲ群、右Ⅰ・Ⅱ群）



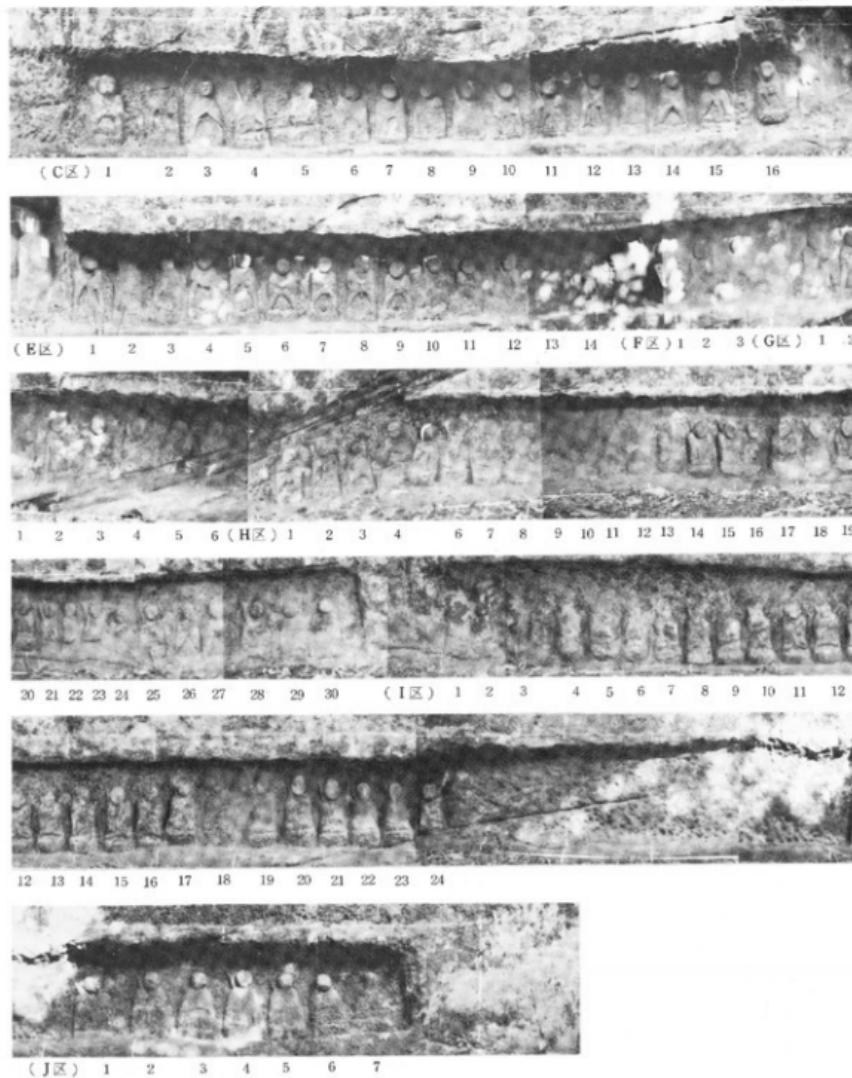
才横穴群Ⅰ群1号穴玄室壁



久戸千体地蔵仏遠景（西から望む）



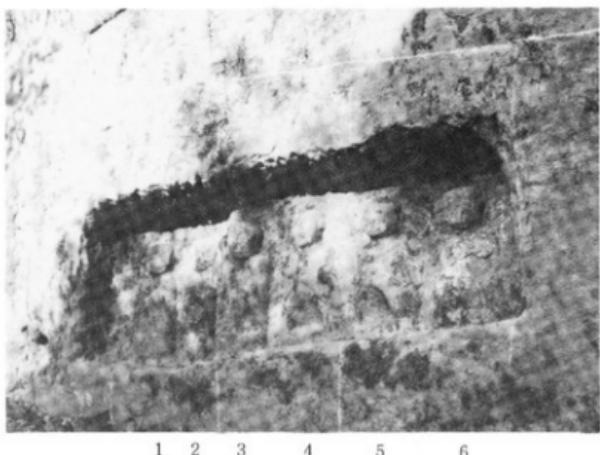
久戸千体地蔵仏（主要部近景）



久戸千体地蔵仏 (C 区 ~ J 区)



(A区)



(D区)

久戸千体地蔵仏(A区・D区)



久戸千体地蔵仏（B区・石窟）



B区石窟前出土石造遺物（1.宝鏡印塔の相輪、2.3.石仏）

穴道町埋蔵文化財調査報告 2

— 地域と古墳と磨崖仏 —

1980年3月 発行

島根県穴道町教育委員会
(八束郡穴道町昭和)

印刷 柳黒潮社